



【新春座談会】

鶴岡で働くこと

今、鶴岡市では高校卒業生のうち、毎年6割以上が地元を離れていく状況にあり、若者の減少と企業の人材不足が課題となっています。

若者に鶴岡で働きたいと思ってもらうためには何が必要なのか。それぞれの思いを語っていただきました。

鶴岡高専地域連携センター長

吉木宏之 さん

一般社団法人あきんどなまか代表理事

菅亮太 さん

鶴岡市長

皆川治

Spiber株式会社社員

高橋あおい さん

鶴岡中央高校総合学科主任

齋藤裕子 さん

鶴岡市商工観光部長

阿部真一（司会）



一同 明けましておめでとうござい
ます。

市長 今日のテーマは「鶴岡で働くこ
と」です。

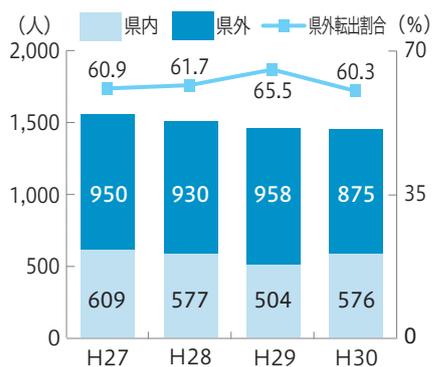
地方の人口減少が進む今、地方創生
や地元回帰がしきりに叫ばれています。
生活する場として鶴岡が選ばれるため
に、子育てや教育の環境、また福祉や
医療などが充実していることはもちろ
ん大切ですが、とりわけ働く環境が整
っていることは重要です。

働く環境を整えて、地元で働くこと
の魅力を発信することは、若者に地元
に残ってもらったり、外に出た人にU
ターンしてもらったり、あるいはイタ
ーンやJターンなど、外から人を呼び
込むことにつながっていきます。

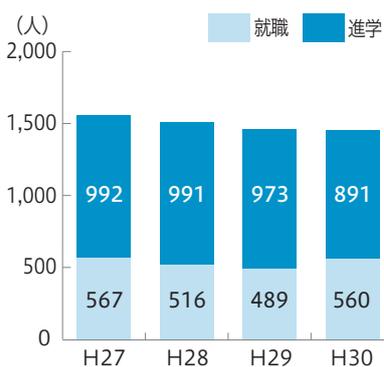
市でも「鶴岡Job Cafe」や「地
元就活応援セミナー」といった、首都
圏進学者やUIJターン希望者を対象
としたイベントを開催していますし、
仙台での合同企業説明会や、保護者向
けの地元就職セミナーなど、若者の地
元就職を後押しする取り組みも行って
いるところです。

今日は、若者に鶴岡で働いてもらお
うと取り組んでいる方や、実際に鶴岡
の企業に就職した方にお出でいただき
ました。どうしたら働く場所として鶴
岡を選んでもらえるか、皆さんと意見
交換しながら、一緒に考えたいと思っ
ます。

▼高校卒業生の進路と県外転出割合



▼高校卒業生の就職・進学の内訳



地元の企業を知ってみたい

司会 近年の市内の高校卒業生の進路
状況を見ると、就職・進学で県外に出
る方が6割以上で推移しています。

そういった中、若者の減少、また企
業の人材不足が大きな課題となってい
ます。その課題に対して、地元企業を
知ってもらう機会を設けたり、地元就
職の魅力を知ってもらったりする取り
ます。



吉木宏之（よしきひろゆき）

鶴岡高専地域連携センター長。副校長（研究・地域連携担当）。創造工学科電気・電子コース教授。同センター長として、地元企業との連携などに取り組み、キャリア教育等を担う

組みが増えてきたように思います。皆さんの活動内容などを教えてください。菅 「あきんどなまか」は、中学生・高校生に地元企業の魅力を知ってもらおうと、「WAKU WAKU WORK」というイベントを開催しています。学校の体育館に、地元企業を20社〜30社ほど呼んで、生徒にその場で職業体験をしてもらっています。高校卒業後の地元就職、そして進学後のUターンの促進を目的に、平成25年に始めました。6年間で26回開催して、5、000人近くの生徒に参加してもらいました。29年度からは庄内総合支庁の委託を受けて、「WAKU WAKU バスツアー」という高校生の製造業体験ツアーも行っています。30年度は鶴岡市の保護者向け企業見学バスツアーと同時に開催しました。

齋藤 鶴岡中央高校は、わくわくワークが始まった当初から参加させていただいています。職業体験をする生徒の生き生きとした顔を見るのが、毎年すごく楽しみです。

最初の頃は教師陣も「鶴岡にこんな企業があつて、こんなことをしている」というのを知らなかったんです。だから、地元企業を呼んでいただくことで、進路指導をする教員も一緒に知ることができました。地元企業を知るチャンスなので、わくわくワークやバスツアーはできる限り続けてほしいですし、学校としても参加し続けたいですね。司会 鶴岡高専ではどのようなことに取り組んでいらっしゃいますか。吉木 鶴岡高専では、企業との連携を強めて、なるべく地元企業に人材を送り出そうという取り組みを進めている

ところで。

鶴岡高専の地域連携センターには3部門があります。1つ目が企業との共同研究や、市民の皆さんへ情報提供をする「地域連携部門」。2つ目が高専の研究拠点として、市の先端研究産業支援センター内で教育研究をする「KARC部門」。そして、今日のテーマに一番関係する「人材育成部門」です。人材育成部門では、3つのことに取り組んでいます。1つ目が「キャリア教育」で、これは地元企業の経営者や高専の卒業生に来てもらって、在校生が話を聞く取り組みです。2つ目が「CO-OP教育」で、これは企業と連携して、学生が企業の中で社員と同じように賃金をもらいながら就労して、「働く」ことをじかに体験する取り組みです。平成24年度に始めて、その就



高橋あおい（たかはしあおい）

Spiber株式会社社員。平成30年3月に鶴岡高専を卒業後、同4月に入社。研究開発部門で、培養・精製業務に携わる

労先企業に就職した卒業生がこれまでに10人います。3つ目が「地域企業訪問研修」で、これは学生が放課後に地域の企業を訪ねて、製品開発などの話や、そこで働いている卒業生の話を聞いてくるという取り組みです。

高橋 私は昨年3月に高専を卒業して、Spiber株式会社（以下、スパイバー）に入社しました。今、吉木先生がおっしゃったような取り組みの中で、2年生のときに、代表の関山の講演会があつたんです。その話に感銘を受けて、私もこの会社で働きたいと強く思いました。

市長 私は高校を卒業し、地元を離れて大学に進学しましたが、大学卒業後の進路のことは具体的には考えていませんでした。地元企業のことほとんど知りませんでした。



菅亮太 (すげりょうた)

一般社団法人あきどなまか代表
理事。Peace株式会社代表取
締役。地元の中学生・高校生など
を対象とした職業体験イベント
「WAKU WAKU WORK」や
「WAKU WAKU バスツアー」等
を開催する



齋藤裕子 (さいとうゆうこ)

鶴岡中央高校総合学科主任。担当
教科は家庭科。進路指導などに携
わり、「WAKU WAKU WORK」
や「WAKU WAKU バスツアー」
を受け入れる

司会 市長が高校を卒業する段階では、
地元の企業をあまり知らなかったと。

市長 私だけでなく大体みんなそうだ
ったと思います。今でこそ皆さんがさ
れているような取り組みや高専の地域
連携センターのような所がありますが、
二十数年前はそうした取り組みはほと
んどなかったんじゃないでしょうか。

吉木 私は大阪出身で、21年前に鶴岡
高専に来たんです。その後、2005
年に、鶴岡に最先端のシステムLSI
(高密度集積回路)の生産拠点が誕生
しましたが、鶴岡高専との連携はあり
ませんでした。せっかく世界と肩を並
べる最先端技術の工場があるのに、な
ぜ連携しないんだと思ったことを覚え
ていますね。

さん知ることができるのはいいことだ
と思います。高橋さんのような地元就
職につながりますし、進学などで鶴岡
を離れたとしても、Uターン就職とい
う選択肢があります。

皆さんのお話を聞いて、若者にまず
地元の企業をもっと知ってもらおうこと
が大切なんだと改めて感じました。

若者が自分の進路を決めるとき

司会 若者が進路を決めるとき、どん
なことがきっかけになるのでしょうか。
菅 高校生に、卒業後にどうしたいか
聞くと、「私、仙台に行く」とかそれ
ぞれ意見が出るんです。でも、「なぜ？」
と掘り下げていくと、正しい情報がそ
ろった中で、それを決めているわけで

はないんですよね。

自分がこれまで生きてきた中で、家
族とか身の回りにある情報から、「鶴
岡にやりたいことはないな。都会だな」
というふうに、考えを固めてしまっ
ている。私の印象ではそれが高校2年生
頃なんです。だから、それより前の段
階で、地元にもこういう企業があるよ
とか、こういう考え方もあるよって教
えてあげるだけでも、かなり意味があ
るのかなと思っています。

齋藤 家族という話で言うと、地元就
職を希望する子は、「家に残るんだぞ」
と言われていて、自分の思いで何かを
決めるといよりは、家族から言われ
て何となく決めている印象ですね。
吉木 高専もそうです。高専はありが
たいことに全国から求人が来ますが、
地元に残る子は、家族の意向に強く影

響を受けていると感じます。

市長 就職ではないですが、家族の意
向という点では私もそうですね。大学
に進学するときに、農学部しかダメだ
と言われて、あまり反論できずに農学
部に入ったんです。歴史が好きだった
ので、そういう勉強をすることを考え
てもいたのですが。

司会 市長もそうだったんですね。高
専の学生の場合、進路への意識はどう
固まっていますか。高橋さんの
場合は2年生でスパイバーに決めた
というお話でしたが。
吉木 高橋さんのような子はまれです。
高専の場合は5年間の中でじっくり進
路を決めていると思いきや、実はそう
でもないんです。というのも、普通の
高校生が進路を決める3年生は、まだ
真ん中の学年なので、学生はそのとき

にできることを楽しんでいる印象です。そして4年生になると、専門科目が増えて、今度は勉強が大変になる。

高橋 4年生の後半になると、研究室にも配属されますからね。

吉木 研究室に配属されて、研究の予行演習のようなことをするんです。その中で4年生の1月ぐらいに1回目の進路希望調査がありますが、そこではまだ漠然としていますね。5年生になって、本当に動き出さなければいけないから就職先などを探している学生が少なくありません。

人材育成部門でいろんなプログラムを用意して、お膳立てはしていますが、多くの学生がそれに乗ってくれているかというところ、まだまだ課題がありますね。

高橋 高専には、細かいことは入ってから考えようという学生が多い印象ですね。その中で「どこに行きたいか」「何をやりたいか」を早く決められるか、後々までずっと悩むかは、その人の生活への意識や、思い描く未来が関わってくると思います。

市長 若者の進路への意識などを伺いましたが、正しい情報がない中で就職先を決めているとか、家族の意向で進路を決めているというのは、昔とあまり変わっていないと感じました。

これからは、もっとしつかりした職業教育が必要なんだと思います。例えば

ば、ドイツの学校などは職業教育がしっかりとしていると聞きます。高等教育機関に進むか職業人を選ぶかを、早い段階から考える機会があるようです。

日本では何となく進学するという風潮が残っていますし、「なぜ学ぶのか」という目的が置き去りにされてきたようにも思います。大きくは日本の教育制度にも関わってきますが、高専生・高校生だけでなく、小・中学生、あるいは幼稚園・保育園から、働くことについて考える機会を増やすことが求められているように思います。

若者への情報の伝え方

司会 若者への情報の伝え方について、どんな工夫が必要だと感じますか。

菅 今、高校生に接していて、労働条件などから仕事を探している子はあまり多くない気がします。雰囲気や人間関係など、一言で言えば働きやすさをすぐく気にしますね。昔と違って、とんでもなく悪い労働条件の会社が、今はあまりないからだと思いますけど。

ただ、個人的にかなり違和感を感じているのは、文字だけの求人票です。文字と数字の情報、あれだけから人生を決めなきゃいけないのは、相当難しいですよ。

齋藤 現実的に子供たちは、やはり文



▲BIGJOB庄内。スマートフォンなどで、簡単に企業の雰囲気を知ることができる

字だけの求人票を基に就職先を決めなければならぬ状況です。給料の金額がどうか、休みがあるかどうかなど、求人票を色々コピーして持ち帰って、家族と相談して決めるわけです。さっきの家族の意向の話にもつながりますが、本人が「ここかな」と思っても、

家族と話してやめる子もいます。

文字だけの求人票だと、保護者が持っている企業の情報やイメージが直接的に関わってきます。でも、どこまで正しくその企業のことを知っているかは分かりません。だから、私たち教員も含め、保護者も本人も企業のことをきちんと知ることが大切だと思います。

菅 実は、あきんどなまかの活動で、「BIGJOB庄内」というウェブサイトを12月に公開しました。これは庄

内のお仕事大百科のようなもので、求人の有無にかかわらず、庄内の企業・事業所なら載ることが出来ます。わくわくワークでやっているようなことをウェブサイトで発信できないかなと思って作りました。

簡単に言うと、ほぼ写真での企業紹介です。難しいことは書かず、企業の写真と理念が載っていて、それをもって企業紹介とする。伝えたいのは労働条件ではなく雰囲気なんです。「楽しそうだなあ」だけでもいいので、わくわくしながら仕事を探してほしいんです。

吉木 それは誰でも見られるんですか。
菅 誰でも見られます。高校生や大学生が、庄内にどんな仕事があるか見るとか、あとは大人が転職したいときに



皆川治 (みなかわおさむ)

鶴岡市長。鶴岡南高校を卒業後、宇都宮大学農学部に進学。農林水産省勤務を経て、地元のために働きたいと平成26年にUターン

見ても楽しいと思います。

齋藤 子供たちと一緒に、保護者にも見てほしいですね。庄内にある企業をたくさん知って、その上で、就職するときのアドバイスをしてほしいと思います。

高橋 今は、基本的に情報収集の方法がパソコンではなくスマートフォンなんです。だから、ビッグジョブ庄内の情報発信の仕方はとてもいいなと思いました。ホームページを検索して企業を探すのは面倒だという人もいますし、そもそも知らない企業のことには調べようがないですから。

菅 企業のホームページを一つ一つ探すのは、効率が悪いですからね。検索したものが出てくるんじゃないかと、見ているだけで情報が入ってくる。そういうものが求められているんですよ。

高橋 今の若者は受け身の人が多いので、情報を流し込んであげる必要があると思うんです。例えば、ツイッターやインスタグラムに、ビッグジョブ庄内のようなウェブサイトにアカウントを作った、それをフォローしたら次々に情報が入ってくる状態にするとか。

菅 SNSと連動していけば、なおさら面白いということですね。

吉木 小学生や中学生にも見せていったら、将来こんな会社に入りたいとか、夢を持つ子もたくさん出てくるような気がしますね。

菅 夢を持つのが楽しいですよ。でも、仕事となると急に現実的になる人が多い。私は夢と仕事はイコールではないと思うんですよ。

吉木 夢を与えるような伝え方ですよ。例えば、せっかくタクト鶴岡のよ

うないホールがあるんですから、鶴岡市としても世界的に活躍している起業家や、ノーベル賞を取られた日本を代表する方を呼んできて、市内の小・中学生や高校生・学生を集めて、話を聞く機会を作るとか。

就職先や進学先を具体的に決める前に、「こんなことをやりたい」という夢を持つきっかけを作ってあげるのもいいと思います。1回だけではなく、何回もそういう機会を作ってあげないと効果は出ないのじゃないかと。

市長 多くの若者が、スマートフォンで情報収集しているという実態を踏まえて、企業の仕事や雰囲気を通して伝えていける仕組みが求められるんですよ。行政としても時代に合った情報の伝え方を考えていく必要があると感じました。

それは単純に「家を継げよ」ということじゃなくて、「外に出るのもいいよ。でも地元もいいよ。外に出たとしても、戻ってくる場所がここにはあるよ」という言葉を掛けてあげること

鶴岡で働いてもらうために

菅 今日一番言いたかったことですが、市民全体の空気を変えていくことが大切だと思っています。

普通に考えて、子供たちが全員地元に残ることはありません。地元を離れる子もいるし、将来戻ってくる子もいる。それを踏まえて、鶴岡で働いて暮らしている人が「ここでの人生は幸せだよ」と語ってあげてほしいなと、私はいつも思っています。

それは単純に「家を継げよ」ということじゃなくて、「外に出るのもいいよ。でも地元もいいよ。外に出たとしても、戻ってくる場所がここにはあるよ」という言葉を掛けてあげること



▲鶴岡Job cafe。カフェにいるような雰囲気の中、気軽に鶴岡にある企業の話の聞くことができる。東京都で開催



▲鶴岡市合同企業説明会。主に隣県進学者を対象に開催。鶴岡にある企業の採用担当者との面談ができる。仙台市で開催

す。それだけで、子供たちの意識が変わってくると思うんです。

でも、どうしても耳に入ってくるのは、「ここは何もないから、どっかに出た方がいい」とか、地元で働くことに対するネガティブな言葉が多い。子供のことは、子供に任せますという保護者も多いですが、正しい情報を与えて、子供にしっかりと考えてもらった上で、任せてほしいと思いますね。

吉木 今、菅さんからネガティブというキーワードが出ましたが、鶴岡には慶應義塾大学の先端生命科学研究所やスパイバーといった、世界的に名が知られているところがたくさんありますよね。そういうのをもっとPRして「鶴岡はすごいところなんだ」と知らせていくことが大事だと思います。

地元の子たちの地元就職を進めるのはもちろん大切ですが、同時に外から若者たちを呼び込まないといけない。

鶴岡には潜在能力の高い企業がたくさんあると思うんです。だから、やっぱり若者に鶴岡の企業をどんどん見ってもらうことが大切で、それがネガティブなイメージを払拭することにもつながっていくのではないのでしょうか。

「鶴岡で働きたい」と思ってもらわなければならない、企業と高校や高専、もちろん行政ですが、協働して取り組んでいくことが必要ですよ。

司会 鶴岡の持ち味や特異性、これを

高校生の製造業体験バスツアー

WAKU WAKU バスツアー

一般社団法人あきんどなまかが庄内総合支庁の委託を受けて実施しています。30年度は鶴岡市の保護者向け企業見学バスツアーと同時に開催しました。その様子を紹介します。



▲株式会社サンススタイルを訪問。工場内見学の後は、実際にミシンを使って縫製体験



参加した保護者の皆さん

高校生のうちに地元企業を知るの大切だと思います。私たち保護者も一緒に見学できるのがいいですね。

伝えていかなければということですね。
市長 今、菅さんや吉木先生のお話を伺って、地元で働く人の「地元で働いてほしい」という熱意の重要性を改めて感じました。

今、思い返してみると、私が高校を卒業するときや、就職を目前にしたとき、地元で働くことの良さを語る人は、少なくとも私の周りにはいませんでした。いい人材を確保するためには、自分たちの仕事に誇りを持って、その良さを伝えていく。そうしていかないと、若者には本当の意味での地元で働くことの良さというのは伝わっていかないのかなと思います。

齋藤 少し前に聞いた話で、なるほどと思ったことがあります。「食」に関するお話です。鶴岡はおいしいものが多い。いろいろあって、食べ物へのこだわりが強い土地柄だと思うんです。地元の行事食や、その土地で育ったお米や野菜などを小さい頃から食べていると、思い出して必ず帰ってくるという。

学校としては、子供たちが自分で考えて将来の選択をするときには、それを応援する立場なので、「地元就職したほうがいいよ」と簡単に勧めることはできません。でも、外に出た子でも、小さな頃からおいしいものを食べていると、いずれは帰ってくるんじゃないかなと感じています。

意外とそういう単純な部分にも、地元回帰のヒントが隠されているのかもしれないです。

市長 私も高校生のとき、企業のことばかり知らなかったのですが、鶴岡にはおいしいものがあることは知っていました。農家だったのでお米はもちろん、ただちや豆や、湯田川孟宗^{もうそう}など、食が充実していることが地元に戻ってくることに繋がっているというお話は、なるほどなと思います。

司会 高橋さんは実際に地元就職されたわけですが、若者から鶴岡で働きたいと思ってもらうためには、どのよ

CO-OP教育

鶴岡高専の地域連携センターが取り組むCO-OP教育。学校での講義と地域企業での就労を繰り返すことで、学生の技術力やコミュニケーション能力など、総合的な就業能力を養います。

これまで10人がCO-OP教育での就労先企業に実際に就職しています。参加した学生の声を紹介します。



化学・生物コース3年
秋山凛 さん
株式会社高研で就労
鶴岡市出身

企業でものづくりに携わる方々の姿勢を学びたいと思いましたが、学校の勉強とは違う慣れない仕事に緊張しましたが、製品を使う人の立場になって仕事をすることの大切さを学びました。



▲CO-OP教育成果報告会。実習内容や学んだことなどを、学生や就労先企業の担当者の前で発表する

うなことが必要だと思いませんか。

高橋 スパイバーは世界中から人が来ていますが、その中で鶴岡は家賃が高いという話になることがあるんです。仙台の郊外地よりも高いと。

庄内の人たちは、自分の土地と家を持つている方が多いですよ。私も今は鶴岡に住んでいますが、酒田に実家があります。持ち家がある人が多いから、賃貸の競合がなくて、家賃が高くなってきているんじゃないですか。

外から来るにしても、一人立ちするにしても、部屋を借りるとするのはすごく大きなことですし、家賃は生活費の中でも大きなウエートを占める部分

なので、もし、家賃がもつと安くなつたらうれしいなと思います。

司会 非常に現実的なお話ですね。住環境をきちんと整備してほしいということですよ。

市長 家賃が高いというお話がありました。賃金や福利厚生は、生活に直接的に関わってきますので、もちろん重要だと思っています。

山形県の数字ですが、共働き率が全国1位、3世代同居率も全国1位で、勤労者世帯の可処分所得が東京都よりも多いですか、ポジティブな数字もあるんです。働く場所として鶴岡を選んでもらうためには、単身の方のこと

も含めて考えていく必要もありますね。

地元を誇りを持つこと

司会 皆さんから様々なお話を聞かせていただきました。今日の座談会を振り返って、市長の感想をお願いします。

市長 どうしたら働く場所として鶴岡を選んでもらえるかということと一緒に考えてきましたが、人には個性や能力がいろいろあります。その人に合った仕事があつて、働く場所も自由に選ぶ権利があります。去年の成人式で、私は新成人の皆さんに対して、「どん

な形でもいいから鶴岡に貢献してほしい」というお話をしました。鶴岡への貢献の仕方は「外に出て行かない」「地元に戻る」ということだけではないんです。それぞれの役割や、やらなければいけないことがある中で、鶴岡を含む日本各地、あるいは海外で勉強に励んだり、働いたりしながらスキルアップしていく。それはとても大切なことだと思います。私からは、生まれ育った皆さんだからこそ鶴岡のことをもっと知って、そしてその良さを伝えてほしい、それぞれの知恵を、力を、鶴岡のために貸してほしいとお願ひしました。

その上で、鶴岡で働きたいと思ってもらえるようにすることは大切です。外で学んだことを地元に戻って生かせる場所を創っていく必要があります。そして、今ここで働いている人たちが、鶴岡で働くことが幸せだと誇れるようにすること。これが何より大切なんだと思います。

皆さんには、ぜひ引き続き取り組みを続けていただきたいです。若者が「ここで暮らしたい」「ここで活躍したい」と思えるようなまちになるよう、私たち行政も一緒に取り組んでいきます。

今日は皆さんの貴重なお話を聞かせていただき、有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございます。

一同 ありがとうございます。